秋風

2-A 西中

今か時間がない…！
あなたの描く将来

今から考える進路
後悔しない将来

高校受験は、高校生活、そして、その後の人生に大きく影響する。高校受験では、一般的に「一般入試」又は「推薦入試」で合否が判断される。目指す進路を実現するためには、中学三年生だけではなく、中学一、二年生からの準備が大切だ。私達にとっては一年後の高校受験、今からできることは何か、考えてみた。

私達の進路

中学校卒業後の進路を考えた時、多くの生徒は高校への進学を考えている。芽室西中学校に通う多くの生徒も高校へ進むという進路を考えている。本校では、総合的な学習の時間の中で、高校に向けた進路の学習を行っている。その検索の中で、高校について調べている。今回は、高校受験について本校の進路担当の先生にお話を伺った。

高校受験

高校受験には、大きく分けて二つの種類がある

一つ目は、一般入試だ。一般入試では、学習点（当日の入試問題の点数）と学力点（当日の入試問題の点数）の合計の高い人からとっていく。これが定員の七十％を占める。残りの三十％は二つに分かれ、十五％は学習点重視、残りの十五％を学力点重視でとる。また、帯広柏葉高校、帯広三条高校、帯広緑陽高校では現在、学校独自の問題である学校裁量問題を取り入れている。学校裁量問題は、二〇二一年度入試から廃止される。

二つ目は、推薦入試だ。推薦入試は、面接と、事前に作成する自己アピール文を使い、合否を判断する。十勝管内では、帯広柏葉高校以外の普通科、職業科、総合学科で取り入れられている。

今からの準備

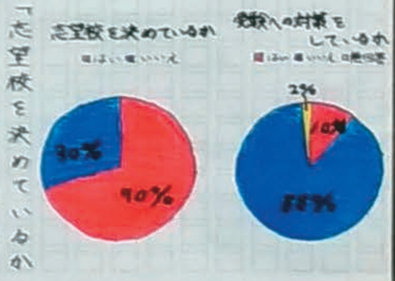
三年生になると、本格的に受験勉強を始めなくてはならなくなる。四月には進路希望調査があり、それまでに志望校をある程度決めていなくていいという。部活動の最後の大会の終わった夏休み明けからがさらに忙しくなる。それだけではなく、学校行事でも中心にならなくてはいけない。

（高校入試までの日程）
四月　進路希望調査①
八～十月　体験入学
十月　進路希望調査②
十一月　説明会
　　三者面談
十二月　私立願書作成
　　公立願書作成
一月　私立推薦入試
二月　公立推薦入試
　　私立一般入試
三月　公立一般入試

三年生になってから困らないためにも、一、二年生からの準備が大切だ。

自分のため

今回、取材を行い、わかったことは、三年生になると忙しくなるため、一、二年生のうちからの積み重ねが大切だということだ。そこで、本校の二年生五十名に、受験への意識について、アンケートを行った。



「志望校を決めているか？」という問いに対しては、七十％が「はい」と答えた。しかし、「受験に向けた対策をしているか？」という問いに対して、「はい」と答えた人は十％だった。一、二年生のうちからの準備が大切とはいえ、一年先のことを考えるのは難しい。目標とする高校を決め、その高校を目指す明確な理由を決めると、モチベーションが高まる。

一人一人が意識を高め、目指す進路を実現できることを期待したい。

（石原　和真）

国民が抱える負担

消費税が今年の十月から十パーセントに増税することが決まっている。

まず、消費税の使い道は、半分を国の借金返済、残りは年金や医療、介護や子育て支援などに回されている。しかし、増税して私達にメリットなんてないと思う人も多いだろう。そこで、増税のメリットを四つ紹介する。

まず一つ目は、「社会保障の充実化」である。具体的には、近年話題になっている待機児童問題について、受け入れ枠を増やすことや、高齢者の医療費負担を減らすことなどがある。

二つ目は、「公共事業への投資額増加」である。具体的には空き地に公園ができたり、橋やダムが建設されたりすることである。

三つ目は、「被災地域の早期復興」である。主に東日本大震災や熊本地震の被災地の早期復興や被災者の方々の生活の支援、救助活動など、一日でも早く普段の生活を取り戻すために使われる。

四つ目は、「税収が難しくなること」である。消費税は買い物をする時に必ず発生するため、消費税の金額をごまかすことはできない。つまり、国は確実に税金を集めることができ、脱税対策にもなる。

しかし、デメリットもある。

このように増税にはメリット、デメリットがあるが、私達が安心安全に暮らせるようにするための増税なので受け入れることが大切なのだろう。（田野奈央）

「なつぞら」から学ぶ農業

皆さんは今年の春から始まったNHKの連続テレビ小説「なつぞら」をご存じだろうか。私たちの周りでもこの作品を見ている人はたくさんいる。

戦後、主人公の広瀬すず演じる奥原なつが、こ十勝にやってきて牛馬の世話や搾乳を手伝う。そんな時、馬の絵を描く少年と出会い、その少年からアニメーションのことを教えてもらった。なつは、アニメーターになることを決意し、上京することを決意する。上京後、北海道・十勝で育んだ想像力と根性を生かし、夢を実現していく姿をこの作品では描いている。

この作品を通して、私たちの住む十勝のようすも改めて知ることができる。今は使われなくなった農機具や生活のようすなど、現在とは比べ物にならないぐらい不便さを感じる。

そこで、現在の農業と「なつ」が生きた時代の農業との違いを調べてみることにした。

まず、「現在の農業と「なつ」が生きた時代の農業の大きな違い、それは畑の面積の規模だ。その理由として、農機具の発展が関係している。現在では、大型で自動化された機械がほとんどだったが、昔は手作業がほとんどだった。最新の技術が導入された機械では、作業の効率化や、多少の悪天候でも作業ができるため、沢山の野菜などを収穫できるようになった。

ここ芽室町の農業について、芽室町の農業を営む方にお話を伺った。

芽室町の特産品であるジャガイモは昔は機械がなく、全て手作業だった。広い畑を近所の人と手分けして収穫していた。また、収穫したジャガイモを小さい工場まで出荷していたそうだ。今は巨大な機械を使ってジャガイモを掘り起こし、トラックで工場まで出荷している。今は面積が広くなり、機械化され、とても楽になった と農家の方に語ってもらった。

この作品は、NHKの連続テレビ小説一〇〇作品目にあたる記念作品ということもあり、ロケ地である北海道・十勝に、聖地巡りや、食事を楽しみに全国から観光客が多数訪れた。この効果で、限定商品が発売されたり、飲食店の売り上げが伸びていたりして、経済効果にとても影響が出ている。それはとても良いことだが、十勝の良さを多くの人に知ってもらえ、その良さをこの作品を通じて広がったことが一番である。この素晴らしい十勝を、もっともっと知っていきたいと思う。

（口田　悠）

花火大会復活劇

皆さんは花火が好きだろうか。最近各地で、花火大会が中止になっているというニュースが流れていた。そんな中、十勝の芽室町で花火大会が開催された。今回は、三十二年ぶりに開催されたのだ。芽室の夏祭りが久しぶりということもあり、芽室町が明るくなった。そこで今回花火を主催してくれた谷口さんに話を聞いた。花火を復活させようとした理由は、元々「めむろ商工夏まつり」のフィナーレで花火を上げていたが、五年前にその祭りがなくなり花火もなくなった。毎年楽しみにしていた町民からも復活を望む声を多くいただき、さらに芽室町での思い出づくりの手助けをしたいと思い開催に至った。今回の花火大会は、全てボランティアの人たちにより開催された。花火は、第四部までであり、遠い距離で見れるのだ。また、打ち上げられた、花火の数は芽室町内の子供の人数分を打ち上げている。子供の人数は三千六百十五人いて、三千六百十本の花火が打ち上げられた。今回の花火大会にあたって大変だったことは資金集めだった。地元の会社などに一件一件訪問し、資金を集めていった。

このように花火大会を開催するにあたって、様々な努力が裏にあった。祭り一つにしても様々な苦労があることがわかった。来年も開催できるように活動を進めてくれている。私たち中学生にも何かお手伝いできることがないか、考えてみたい。そして来年も、これから先も、芽室町の子どもたちに、花火を見せて感動させて欲しいと、願っている。

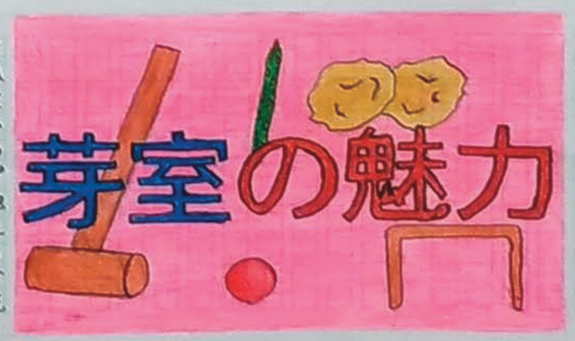
（布谷　翔佳）

芽室の魅力

私たちが住む芽室町には、多くの魅力がある。その魅力について紹介していく。

まず『豊富な食料』があるということである。なんと食料自給率が二千％を超えている。特産物は、トウモロコシ・ジャガイモ・アスパラガスなどの野菜が有名である。畑が多く、たくさんの食材をとることができるところがその要因の一つである。そんな野菜をふんだんに使い、コーン チャーハンが生まれた。この料理は、チャーハンの上にたっぷりコーンを乗せた芽室のご当地グルメだ。このグルメによって、『芽室＝コーン』のイメージを強くしている。おいしい食材をたくさん食べられて幸せである。

次に『美しい自然』について取り上げる。自然豊かな公園が家の近くにたくさんある。また、スキー場もあり、その頂上から見る芽室町は緑と茶色しかなく、自然に囲まれている。他にも、花畑浦園の花々、防風林なども美しい自然の一つである。この自然もまた、私たちの生活をよりよくしている。



最後に『ゲートボール発祥の地』ということだ。ゲートボールは昭和二十二年に芽室町で考案され、現在は世界各地で親しまれており、全国大会が行われるほど有名なスポーツとなっている。また、今では子供たちがゲートボールを楽しんでもらえるような取り組みもなされている。芽室町はスポーツ面でも魅力がある。

このように、芽室町には『豊富な食料』や『美しい自然』『ゲートボール発祥の地』という魅力があることがわかった。そのような魅力がある芽室町で生活する私たちは、とても幸せに暮らすことができると改めて感じることができた。

（丹治美夕羽）

西中の楽しみ

学校では一日の三分の一、およそ八時間を過ごしている。その中で、お昼の放送は一〇分。その中で、他とは違う放送をする、放送委員の中村匠氏にお話を伺った。

一年生のとき、毎日お昼の放送を聞いていて、もっと楽しい放送にしたいと思ったのが始まり。最初は少し恥ずかしかったが、クラスの人たちに「面白かったよ」「次楽しみ！」との応援の声をかけられ、自信をもてた。最近の面白い話や、モノマネなどで、もっと給食を楽しくしたい。

多くの生徒が楽しんでいる一方で、反対の声もある。そのことについて「自分との価値感が違うのは、あたりまえ。多くの人が喜んでいるので、私は多いほうに賛同する。もし、反対する人がいるのなら、今よりもっと面白い放送をしたい。」と、語ってくれた。

私たちは学校の何に楽しみを得ようとしているか？その中で「給食」と思う人もいるだろう。その給食をもっと楽しませようとするユーモアな人をこの学校の誇りであると感じた。（口田　悠）

編集後記

今回、私達は「秋風」を通して、「将来」をメインテーマに壁新聞を作成しました。このタイトルでは、鮮やかで明るい秋の色のような、私達のクラスの雰囲気をイメージしました。

私達は、作業を全員で分担し、手のあいている人がいないよう一人一人が自分の責任を果たしてきました。

この新聞の作成、取材にご協力頂いた皆様本当にありがとうございました。

〈制作スタッフ〉
石原和真、田野奈央
布谷翔佳、阿部龍哉
口田悠、丹治美夕羽